

Title	「世代間交流」学の樹立に向けて
Sub Title	For the establishment of intergenerational studies
Author	村山, 陽(Murayama, Yo)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2011
Jtitle	哲學 No.125 (2011. 3) ,p.75- 104
JaLC DOI	
Abstract	Currently, Japan faces an emerging need for intergenerational engagement due to an ageing society with fewer children. In particular, one expects the support from elderly people in local communities under the circumstances of increasing ratios of nuclear family and dual-income couples. Historically, the differences between generations have been regarded as the probable cause of intergenerational conflict. However, it is essential to reconsider the dynamics of intergenerational exchanges and apply these findings in the development of various intergenerational programs between elderly people and children in local communities. Therefore, this study is aims to explore the concept of generation from the perspective of intergenerational exchanges. First, I examined the shifts in the traditional theory of generation. Second, I investigated studies in Japan and the United States and then reviewed empirical research projects and theories on intergenerational relationships. Finally, I discussed the subjectand development of intergenerational relationships. In this study, I expect to advance a new framework for the study of generations, "intergenerational exchanges," which is fixed with the social psychological aspects of age and society.
Notes	特集：人間科学 投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000125-0075

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

— 投 稿 論 文 —

「世代間交流」学の樹立に向けて

— 村 山 陽* —

For the Establishment of Intergenerational Studies

Yoh Murayama

Currently, Japan faces an emerging need for intergenerational engagement due to an ageing society with fewer children. In particular, one expects the support from elderly people in local communities under the circumstances of increasing ratios of nuclear family and dual-income couples.

Historically, the differences between generations have been regarded as the probable cause of intergenerational conflict. However, it is essential to reconsider the dynamics of intergenerational exchanges and apply these findings in the development of various intergenerational programs between elderly people and children in local communities.

Therefore, this study aims to explore the concept of generation from the perspective of intergenerational exchanges. First, I examined the shifts in the traditional theory of generation. Second, I investigated studies in Japan and the United States and then reviewed empirical research projects and theories on intergenerational relationships. Finally, I discussed the subject and development of intergenerational relationships. In this study, I expect to advance a new framework for the study of generations, “intergenerational exchanges,” which is fixed with the social psychological aspects of age and society.

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科後期博士課程

はじめに

近年、核家族化や都市化が進むにつれて、家庭や地域において日常の自然発生的な世代間交流の機会が減少している。こうした背景から、福祉や教育などさまざまな分野で世代間交流の重要性が指摘され、自治体レベルでさまざまな交流プログラムが検討されるようになってきた（原，2005；北村，2003a；北村，2003b；土永・岡崎，2005）。

学校現場では文部科学省の主導のもとに、2002年から「総合的学習の時間」が導入され、地域の高齢者が小学校のカリキュラムに積極的に参加する機会が設けられている。2008年からは学校・家庭・地域の連携協力のもとに子どもを育てる体制を整えることを目的に、学校支援地域本部事業がスタートしている。

その一方で、世代間交流があまり進展していない現状や行政主体の世代間交流に疑問が投げかけられている（野呂，2001；渡辺，2004；關戸，2006）。また、地域における世代間交流が始まって間もない我が国では、世代間交流の課題にこたえられる理論や実証研究はそれほど多くない。

本稿では、世代論の歴史的変遷を概観したうえで、米国を中心とした世代間交流研究（理論と実証）の現状を概観し、今後の世代間交流研究のあり方を論じていくことにする。

1. 世代論の変遷

「世代」とは、「生まれた年をほぼ同じくし、時代経験を共有し、物の考え方や趣味・行動様式などがほぼ共通している一定の年齢層」と定義されている（「大辞林」）。また英語の generation には、親から子への「世代交代」がなされる約30年間という意味が含まれている。人口学的には「世代」概念を、ある年代間隔に出生した人口集団を同時出生集団と定義している。例えば「団塊の世代」、「団塊ジュニア」といった呼称がそれに

あたる（山口，1990）。

社会学における「世代」概念の扱い方には、実証主義と歴史主義という2つのアプローチがある（那須，1962）。実証主義の立場では、世代は年齢集団の生物的継起として捉えられ、数量的に観察される。コント（Comte）は「30年間隔で世代は交代する」との法則をたて、この「世代」概念から、社会秩序の交替に関する一般法則をとらえようとした。

歴史主義の立場では、世代を量的には捉えられない内的経験に求め、社会変動の質的な転換が重視される。デュルタイ（Dilthey）は、「暦年齢の同類性よりも精神的影響または社会的影響の同類性こそが世代を構成する」とも指摘している。20世紀になるとさらに2つの世代論（①オルテガの世代論、②マンハイムの世代論）が唱えられた。

オルテガ（Ortega, 1923）は、「世代」を抗争として捉え、世代間の力関係が歴史社会的変動をもたらすと指摘している。

マンハイム（Mannheim, 1928）は「世代」の対立性に焦点をあて、「世代」が精神運動や社会運動を理解するのに必須の指標であると主張した。さらに、マンハイムは、「世代の状態」「世代の連関」「世代の統一」という3つの世代概念から捉え、出生児に同じ世代状態に置かれた個人が歴史的・社会的に共通の運命へ参与して世代連関を構成することで、反応の統一性である世代統一が成立すると指摘した。

1960年代になると、マンハイムの世代論をもとに、アメリカの社会心理学者ベングツソン（Bengtson, 1989）が、「世代」の実証的な検討を試みている。彼は、当時ベトナム戦争や学生運動を背景にしてマスメディアで取り上げられるようになったジェネレーションギャップ（generation gap）の存在に疑問を抱き、世代間の差違と類似を生む原因は何かを明らかにしようとした。

彼は「世代」概念を、①コホート（cohort）効果（出生した時点の時代精神の差違）、②リネッジ（lineage）効果（家族間の世代間の差違）、③時

代効果（異なる時点の態度）という3つのパースペクティブから定義している。マンハイムが、世代間の差違に焦点をあてたのに対して、ベングツソンは、世代間の文化の共有と継続を強調している。とりわけ、家族内ヒエラルキーを「世代」とし、祖父母を含む家族をサンプルとした調査から、その「家族連帯」を3次元（①客観的連帯：交流内容や頻度，②主観的連帯：愛情の認知，③価値観の一致：意識の類似性）で捉えた。

それを踏まえて「ジェネレーションギャップ (generation gap)」を説明する「発達投機理論」(developmental stake theory) を提唱している。この理論によれば、年長世代は世代間の差異を最小限にしか認知せず、世代間の継承の側面に関心を抱くようになる。それに対して、若者世代は、自らのアイデンティティ (identity) の確立に対して強い関心があり、年長世代が望む「継承」を受け入れることは自らのアイデンティティを喪失することになるのではないかと恐れる。こうした意識の差違から、ジェネレーションギャップが生じると説明している。

このように、「世代」概念はその類似性と差違が論じられてきた。特にマンハイムは、世代の変化 (change) に、ベングツソンは世代の連続性 (continuity) にそれぞれ注目し、世代概念を大きく発展させた。

その一方で、これまでの「世代論」の議論では、世代の一側面のみに焦点があてられ、そのダイナミクスを捉える視点が欠いているとの指摘も見られる (Rosenberg, Layne & Power, 1997)。世代間の差違や類似の議論から、世代差を明らかにするには有益であるが、現実には異世代同士がどのように関係を構築しつつ自らの世代を確立していくのかを探究することはできない (Scabini & Marta, 2006)。

言いかえれば、これまでの「世代論」は、世代間の対立を論じる際には有用な概念であるが、今日の社会で求められている世代間交流を論じることには適してはいないと考えられる。つまり、世代の“隔絶”からではなく、“交流”から論を展開していくことが必要である。

こうした視点から、本稿では“世代間交流”という立場から、世代間関係の構築と進展について論ずることにより、世代対立から世代間交流への理論的転換を行う。

2. 世代間交流研究の始まり

世代間交流研究の始まりは、60年代から70年代の米国における世代間交流プログラムの進展と関係している。当時米国では、核家族化や退職者コミュニティの移住のような家族の中の世代断絶を背景に、子育て放棄や虐待、高齢者の孤立といったさまざまな社会問題が指摘されるようになった。こうした状況において、地域の高齢者と子どもをつなげる試みとして世代間交流プログラム (intergenerational program) が生まれ、全米各地に広まっていった (Larkin & Newman, 1997)。

米国で最初の世代間交流プログラムは、1963年の“Adopt a Grandparent Program”とされる。このプログラムは、近所の病後療養所に子どもが訪問するというものである。1960年代後半には、連邦政府の資金により3つの全国的な世代間交流プログラム（里親祖父母プログラム、退職シニアボランティア、国立サービスラーニングセンター）が始められた。

1978年には、ピッツバーグ大学 (the university of Pittsburg) 教授（現 名誉教授）のサリー・ニューマン (Sally Newman) を中心に、世代間交流プログラムの実践者と研究者が協力したネットワーク組織“Generations Together”が設立され、80年代には全米に広がるネットワーク組織にまで発展した。

80年代から90年代になると、世代間交流プログラムの関心は、若者および高齢者に係わる社会問題の解決へと移っていく。若者については、低い自尊心、不十分なチャイルド・ケア・システム、学校中退、薬物・アルコール中毒、10代の妊娠、ギャングへの関与、リテラシー (literacy) といった問題への対策に焦点が当てられた。

「世代間交流」学の樹立に向けて

高齢者については、孤独や孤立、薬物・アルコール中毒、低い自尊心、不十分なケア・システム、リテラシー、失業などの問題が取りあげられた。その結果、世代間交流プログラムは、健康、福祉、学校教育、社会教育といった多様な社会問題を解決する手段として期待されるようになった。

世代間交流研究は、こうした世代間交流プログラムの進展にともないその効果を検証する試みとして進められてきた。今日では、発達心理学、教育学、心理学、社会学、老人学といった多領域で扱われ、高齢者と子どもに与える効果、世代間交流プログラム、世代間交流に実践に必要なスキル、世代間交流をサポートする公的政策などが研究対象とされている (Larkin & Newman, 1997)。

アメリカにおける世代間交流関連の論文は、老年学領域では、“The Gerontologist” や “Educational gerontology” に多く掲載されている。また、家族社会学領域では、“Journal of Marriage and Family” において、祖父母と孫の世代間交流が論じられている。2003 年には、ピッツバーグ大学のサリー・ニューマンを編集者とする世代間交流専門の学術雑誌 “The Journal of Intergenerational Relationships (JIR)” が刊行されており、研究者だけではなく、政策者、実践家、教育者などが、世代間交流に関する調査研究、実践の方法論、政策やプログラムの提案をしている (付録 1 参照)。

大学における「世代間交流」プログラムを見てみると、1999 年にフィンドレー大学 (The University of Findlay) において、米国で初めて “Intergeneraitonal Studies” が開講されている (池田, 2007)。

ピッツバーグ大学では、世代間交流プログラム実践家育成のための講座 (オンライン講座と実践) を設けており、13 週にわたるプログラム終了後には、“Interenerational specialist” としての証明書が発行される。受講者の多くは、教育や社会福祉関係者であり、受講後は各施設で世代間交流

プログラムをコーディネートする立場として活躍しているという。

3. 世代間交流研究の実際

世代間交流研究では、老年学や教育学の視点から、世代間交流プログラムの効果が検討されてきた（表 1 参照）。以下では、①小中学生と高齢者、②高校生と高齢者、③大学生と高齢者、の関係をとりあげてその研究を概観し、その課題を検討する。

小学生と高齢者との世代間交流に関する研究では、子どもの高齢者イメージ、エイジング観、高齢者に対する態度などが検討され、総じてポジティブな効果が示されている。

例えば、Newman, Morris & Streetman (1999) は、「学校メンタリング・プログラム」における高齢者と児童の相互作用を取りあげ、世代間交流の行動分析の測度である Elder-Child Interaction Analysis (ECIA) を使用して子どもの社会的行動への効果を観察した。その結果、高齢者が児童を励ましたり賞賛したりしながら課題に取り組む様子が観察され、相互にポジティブな交流であることが明らかにされた。

青年と高齢者との交流を扱った研究では、キャリア教育やドロップアウトした学生へのサポートがとりあげられ、総じてポジティブな効果が示されてきた。

例えば、Brabazon (1999) は、ドロップアウトしそうな高校生を対象にした世代間交流プログラム (Intergenerational Work/Study Program: IWSP) をとりあげ、参加学生に対する効果を検討した。その結果、世代間交流プログラム（社会活動やリクリエーション活動など）への参加が、出席率の向上をもたらすことが示されたのである。

大学生と高齢者との交流を扱った研究では、若い大学生とシニア学生との交流を通したエイジング教育や高齢者理解が検討され、そのポジティブな効果が認められている。

「世代間交流」学の樹立に向けて

表 1. 世代間交流研究の概観

研究者	交流参加者		交流内容	結果
	若者	高齢者		
Newman, Faux & Larimer (1997)	小学 4,5 年生 71 名	プログラムに参加した高齢者	小学校におけるシニアボランティアと児童との交流	高齢者やエイジングに対する見方がポジティブに変化
Newman, Morris & Streetman (1999)	5-10 歳の小学生 350 名	学校近くのコミュニティのシニアボランティア	学校メンタリング・プログラム	高齢者やエイジングに対する見方がポジティブに変化
Chowdhary et al. (2000)	8-10 歳の小学生 208 名	老人ホームの高齢者	小学校における 5 日間にわたるカリキュラム (4 日目に老人ホーム訪問)	いくつかのクラスで、エイジング観にポジティブな効果
Dunham (2009)	小中学生 380 名	11 名のシニアボランティア	小中学校におけるシニアボランティア (教育支援) との交流	エイジング観がポジティブに変化
Chapman & Neal (1990)	70-75 歳の高齢ヘルパー 25 名・53-92 歳の高齢レシビエント 25 名	9-18 歳の若者ヘルパー 45 名・14-16 歳の若者レシビエント 163 名	雇用プログラム・リクリ (1990) エーション・プログラム	高齢者の若者観のみ (若者ヘルパー群のみ) ポジティブに変化
Barton (1999)	14-17 歳の男性 9 名 (非行青年)	施設の高齢者	2 ヶ月にわたる 90 分のクラスセッションと、6 回 (1 回 2 時間) の高齢者訪問 (老人ホーム)	若者の高齢者に対する態度がネガティブに変化
Brabazon (1999)	高校 2 年生 231 名	プログラムに参加した高齢者	ドロップアウトしそうな高校生を対象にした世代間交流プログラム (IIWSP)	一部のプログラムで出席率の向上に寄与
Eddy (1986)	20-35 歳の看護学生 2 年生 56 名	60 代から 91 歳までの健康的な地域の高齢者	エイジング・カリキュラム (5 回にわたる高齢者訪問)	態度変化は見られず
Dellmann-Jenkins, Fowler ら (1994)	若い大学生 22 名	シニアゲスト 8 名	大学生とシニアゲスト生との 3 ヶ月間にわたる世代間交流セミナー	大学生の老人学への関心、高齢者を受け入れる気持ちの高まり
Knapp & Stubblefield (2000)	大学院生 44 名 (19-46 歳の対照群 22 名, 20-77 歳の実験群 22 名)		若い学生とシニア学生が、エイジングについて学び、体験を共有する (世代間サービス・ラーニング・コース)	より現実的なエイジング観、高齢者に対する態度がポジティブに変化
O'Hanlon & Brookover (2002)	平均年齢 27 歳の学生 55 名	65 歳以上の地域在住の高齢者	高齢者へのライフ・ヒストリーインタビュー	高齢者に対する態度がポジティブに変化

例えば, Knapp & Stubblefield (2000) は, 世代間サービス・ラーニング・コースの効果を検討した. このコースは, 若い学生とシニア学生が, エイジングプロセスについて学び, 体験を共有するもので, コース開始前後に質問紙調査およびインタビュー調査が行われた. 質問項目は, Palmore (1980) のエイジングクイズ (Facts on Aging Quiz: FAQI と FAQII) により構成された. その結果, コースの受講が若い大学生の現実的なエイジング (加齢) 観の形成をうながし, 高齢者に対してよりポジティブな態度を形成することが指摘された.

以上で見たように, 先行研究では総じて世代間交流プログラムを通した単純接触によるポジティブな効果が認められ, そのプログラムの有用性が主張されている.

他方で, 少数ではあるが交流による効果が示されなかった研究も散見される. Chowdhary et al. (2000) は, 小学校における 5 日間のカリキュラム (4 日目に老人ホーム訪問) の前後で子どものエイジング観の変化を検討した. その結果, あるクラスでは効果が示されたが, 他のクラスでは全く示されなかった.

非行青年を対象にした世代間交流プログラムでは, 交流前後で高齢者に対する態度にネガティブな影響が見られた (Barton, 1999). また, Chapman & Neal (1990) は, 高齢者と青年による 2 つの世代間交流プログラム (①職業体験プログラムと②リクリエーション・プログラム) を設定し, プログラム開始前後でそれぞれの効果の有無を検討した. その結果, 職業体験プログラムにおいて高齢者を助けた若者グループのみに, 高齢者に対する認識がポジティブになったり, 社会的な距離が縮まったりという変化が示された.

Eddy (1986) は 20～35 歳の看護学生 2 年生 56 名が, 60～90 代までの健康的な地域の高齢者を訪問するエイジング・カリキュラム (全 5 回) を作成し, 学生の高齢者への態度に与える影響を検討したが, その変化は

全く認められなかった。

これらの研究から指摘されることは、世代間交流の効果が単純接触によるものだけではなく、複雑なプロセスや多様な要因が絡んでいることである。世代間交流プログラムの効果が示されたとしても、対照群のある介入が行われていなかったり、データを理論的に支える理論構築が不十分だったりする研究も多く見られる。

今後の課題は個々の世代間交流プログラムの検証だけではなく、体系的に世代間交流を捉える理論構築が必要であろう。

4. 日本における世代間交流研究の実態

日本における世代間交流に関する研究の現状について、Cinii（国立情報学研究所論文情報ナビゲータ）によるキーワード分析を実施した。2009年12月まで“世代間交流”をキーワードにして検索した結果、1981年から2009年までの間に250件の論文がリストアップされた（書評や大会論文集は除く）。図1は研究数と年代の推移を示したものである。世代間交流に関する論文は、1981年に「社会教育」の特集（世代間交流と社会教育）の中で初めて取りあげられたが、1998年までは毎年1～2件程度であった。

1999年には、「公民館」に特集『異年齢集団と世代間交流』が組まれた。また、大学研究紀要や研究機関（特に、第一生命経済研究所ライフデザイン研究；北村安樹子）において世代間交流が研究テーマとして取りあげられている。

2000年から2003年までは、毎年10件程度の論文が刊行されている。この期間には、「老年精神医学雑誌」、「厚生福祉」、「日本家政学会誌」などの主要な学会誌にも「世代間交流」がとりあげられるようになる。また、この時期に、信州大学教育学部の草野篤子（現白梅学園大学）を中心に、世代間交流に関する多くの研究論文が発表された。

2004 年になると、検索数は 48 件に急増する。その理由として、「現代のエスプリ」(444)の特集として『インタージェネレーション・コミュニティを育てる世代間交流』が掲載されたことが考えられる。本著の中には、国内・国外の研究者による世代間交流の理論と実践に関する論文が集約されている。同年には世代間交流に関心がある福祉、介護、教育といった多領域の研究者や有識者らにより日本世代間交流協会が設立され、その協会員を中心に再び「社会教育」に特集（世代間交流）が載せられる。

2005 年から 2008 年までは、毎年 20～30 件の論文が掲載されている。同年より都立老人総合研究所（現健康長寿医療センター）の藤原佳典を中心に、老年学領域での研究が現われはじめる。2006 年には、世代間交流国際フォーラムが早稲田大学で開催され、海外参加 9 カ国、300 人余りの参加者が世代間交流の実践報告をした（草野、2007）。

2008 年には、「地域開発」特集（世代間交流・連携による地域振興）、「生きがい研究」に 3 論文（世代間交流がもたらす高齢者の生きがい）が掲載されている。2009 年は特集が組まれた雑誌はなく、論文数も半減している。

論文内容の推移を見てみると、1980 年～1999 年までは、社会教育に関する内容が主であったことがわかる（表 2）。2000 年～20004 年には、地域や教育に焦点をあてた研究数が多くなる。2005 年以降は、老年学、建築学、福祉といった多様な領域で扱われ、具体的な世代間交流プログラムに言及した論文もみられる。

2010 年 7 月に、『日本世代間交流学会』が設立されたことで、世代間交流に関する研究の増加が予想される（付録 2 参照）。

米国に比べて祖父母との同居や近居の多い日本では、地域における世代間交流はそれほど重要な研究テーマとされていなかったが、90 年代後半になると、育児や老後の生きがいといった問題について、世代間交流の視点からの研究が増加してきた。しかしながら、依然として社会科学領域

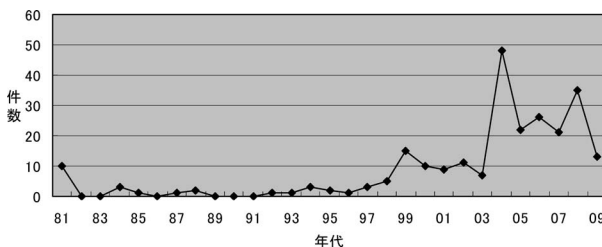


図 1. 世代間交流に関する研究件数の推移

(心理学含む)における研究は少なく、科学的な研究デザインに基づいた実証研究がなされていないことや、確立された理論がないという課題も指摘されている (Venver Ven, 2004; Breijtspraak, Arnold & Hogan, 2008).

5. 世代間交流の理論

世代間交流研究では、研究テーマに応じて、さまざまな理論が使われてきた。以下では、(1) 個人の発達、(2) 対人接触、(3) 集団葛藤、(4) 社会ネットワーク、に分けてその理論を概観しその課題を検討する。

(1) 個人の発達に焦点をあてた理論

子どもの心的発達に注目する研究では、社会的学習理論 (social learning theory) が援用されている (例えば, Blechman, 1992)。社会的学習理論とは、Bandura (1977) が観察学習の研究知見をもとに提唱した理論であり、無報酬であっても学習が成立するという立場である。観察学習とは、他人の行動を観察することで同じような行動が学習されるプロセスのことをさす。

Bryant (1985; 1987) は、社会的学習理論にもとづき児童の共感性の発達に関して質問紙調査を実施した。その結果、祖父母や近隣の高齢者とのかわりの機会と児童の共感性に正の関連性を見いだしている。共感性は、「他者理解に重要な感情であり、他者が感じている感情状態を知覚し、

表 2. 世代間交流論文の内容の推移

	社会教育	教育	老年学	福祉	地域	建築	政策	医療	社会科学	その他	計
2005～2009	13	9	11	16	36	12	5	2	3	10	117
2000～2004	4	15	6	8	17	2	9	4	0	17	82
1995～1999	5	4	2	3	4	2	1	0	0	2	23
1990～1994	0	0	2	1	0	0	0	0	0	0	3
1985～1989	0	3	1	2	1	0	0	0	0	0	7
1980～1984	10	0	1	0	0	0	0	0	0	0	11

自分も同じ感情状態を経験すること（伊藤・平林，1997）」と定義されており，子どもの社会性の発達との関連が示されている（桜井，1986; Eisenberg & Shell, 1992; 渡辺・衛藤，1990; 菊池，1998）。

Bryant は，祖父母や近隣の高齢者との関わりと共感性発達との関連について，親と違い非判断的な対応と無条件に子どもの感情を受容するため，子どもが自己と他者の感情を認識する機会を創り出す存在になっていると指摘している。

村山(2009) は，Kelly ら(1983)の親密さの概念を用いて高齢者と子どもとの交流を捉え，その規定要因と影響について，10～12歳の小学生381名を対象に質問紙調査を実施した。その結果，物理的な距離・児童性別・高齢者性別が，高齢者との交流を規定していた。また，高齢者との交流が，①子どもの共感性，②高齢者イメージおよび高齢者への援助行動に影響することが見いだされた。

生涯発達心理学領域では，子どもと高齢者をつなぐ概念として，Erikson(1950)の成人期後期の発達課題である「世代継承性(generativity)が取りあげられている。

「世代継承性」とは，次世代を育成することで，自らが属する社会の将来像を形成するとともに，自らも社会的存在として世代継承的サイクルに含まれることを示す概念である（吉田，1995）。

Kotre(1984)は，この「世代継承性」には関係性(communal)と個体

性 (agentic) という 2 側面があることを指摘している。関係性とは、継承する対象に伝えることに強く関心を持ち、他者との関係性に存在意義を見いだす側面である。個性性とは、自己に強く関心を持ち、自己発展的な自己の存在意義である。そのうえで彼は、「世代継承性」を、①生物学的世代継承性 (biological generativity)、②親的世代継承性 (parental generativity)、③技術的世代継承性 (technical generativity)、④文化的世代継承性 (cultural generativity) の 4 タイプに類型化したのである。

Levinson (1978) は、60 歳から 65 歳の時期を「中年期から老年期への移行期」(late adult transition) と名付け、この時期にこれまでの生活構造を修正し、社会との関わりや自分自身との関わりに新しいバランスを見出すことが発達課題になると指摘している。こうした中高年の世代継承性は、次世代の育成を目的とした地域活動や社会参加を促すことが示されている (Pratt, Danso, Arnold, Norris & Filyer, 2001; Raynes & Rawlings, 2004)。

(2) 対人接触に焦点をあてた理論

世代間の対人接触については、Allport (1954) の接触仮説 (contact hypothesis) に基づいた理論が提唱されている。接触仮説 (contact hypothesis) とは、「集団同士の接触機会を増やし、相互理解を促進することが偏見の解消につながる」と説く理論である。Allport は、外集団への偏見を低減するための、4 条件として①平等性、②共通の目的、③社会的あるいは権威者の支援、④協力関係を挙げている。

Hewstone & Brown (1986) は、接触理論をもとに、集団間接触モデル (intergroup contact model) を提唱した (図 2)。このモデルには、9 つのステージ①社会的要因、②接触状況、③接触効果を強める要因、④個人間もしくは集団間の接触、⑤接触状況における認知プロセス、⑥類似性もしくは差違に焦点、⑦相互作用者により接触の認識 “ポジティブもしくはネガティブ”、⑧ターゲットの外集団メンバーの認識 “ポジティブもしくは

はネガティブ”，⑨態度変化の一般化，が仮定されている。

さらに Fox & Giles (1993) は，Hewstone & Brown のモデルを世代間交流に適用して「世代間接触モデル」(intergenerational contact model) を提唱した (図 3)。これは，高齢者の感情，目的，動機，価値観が若者に影響すると同時に，若者の感情，目的，動機，価値観が高齢者に影響を与えるモデルになっている。

Roy, Sharon & John (1996) は，「個人の発達，環境との互恵的なダイナミックな相互作用の中で発達する」として “dynamic intergenerational model” を提唱している。学校において子どもが受けた影響が，彼らの両親やその他の大人にも波及するモデルである。

(3) 集団葛藤に焦点をあてた理論

世代間交流を集団行動として捉える研究では，Tajfel & Turner(1979, 1986) が提唱した社会的アイデンティティ理論 (social identity theory) が援用されている。社会的アイデンティティは，「感情や価値観をともしなうある集団に属することで獲得される自己概念の一部」と定義されており，社会的アイデンティティを得ようと動機づけられている個人が想定さ

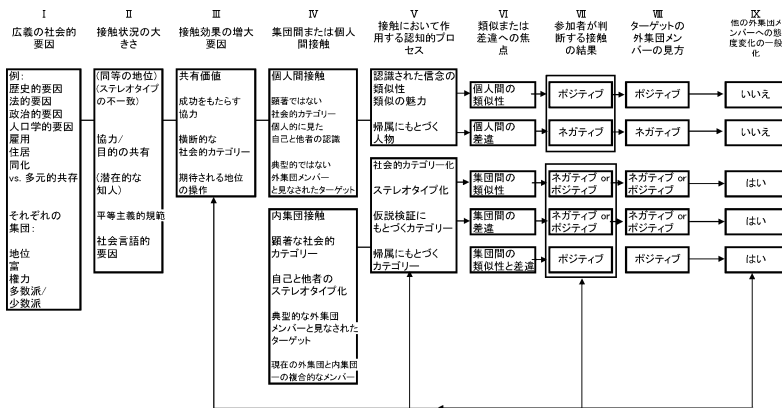


図 2. 集団間接触モデル (Hewstone & Brown, 1986 より)

れる。

社会的アイデンティティ理論をコミュニケーション場面に適用した理論に Coupland ら (1991) の提唱するコミュニケーション・アコモデーション理論 (Communication Accommodation Theory: CAT) がある。

CAT は、話し手が集団の同定や個人間の連帯といった多様な目的を達成するために、コミュニケーションスタイルや会話のトピックを相手に話を合わせることを「調節」(accommodation) とし、異集団間のコミュニケーションの差異を強調している。

もともと CAT は、母国語の異なる 2 者間に焦点をあてたものであったが、集団間のコミュニケーションと言語使用の検討にまで理論的パラダイムを広げ、世代間のコミュニケーションに関する研究も行われるように

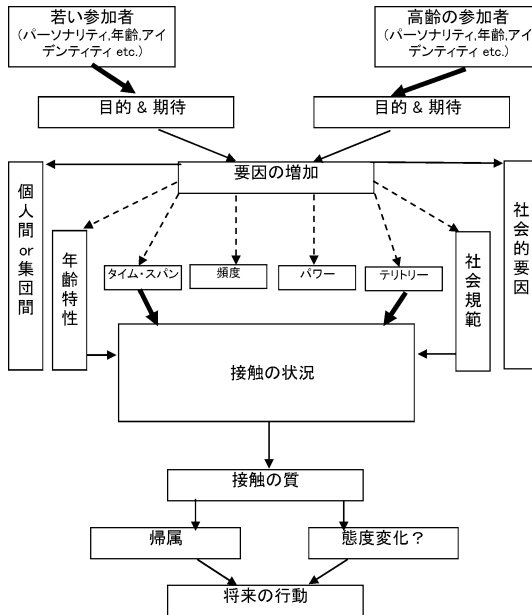


図 3. 世代間接触モデル (Fox & Giles, 1993 より)

なった。世代間コミュニケーションでは、若者による高齢者に対するコミュニケーション形態として「過剰調節」(over accommodation)、高齢者による若者に対するコミュニケーション形態として「過少調節」(under-accommodation)が指摘されている(岩隈, 2002)。

「過剰調節」とは、若者が相手の高齢者の能力や欲求に関わらず単純な話題を選び過剰な丁寧さや注意を払うコミュニケーション形態のことであり、これは高齢者に対するネガティブなステレオタイプに基づいていると指摘されている(Williams & Giles 1996)。こうした話し方は、多くの高齢者には無神経と認識され、不快に感じられているという。

「過少調節」とは、高齢者による非高齢者に合わせずに、ニーズを無視したコミュニケーション形態のことである。例えば、会話の流れとは外れた話題を延々とする高齢者の話を、我慢して聞いている若者の姿がこれにあたる。

(4) ネットワークに焦点をあてた理論

ネットワークと世代間交流との関連が検討されている。例えば、地域における世代間交流が住民同士の協同をうながし、コミュニティの安全や持続型コミュニティの構築につながることが指摘されている(Pain, 2005; 広井, 2006; Yarrow, 2009)。

近年では、ソーシャル・キャピタル(social capital)の視点から、世代間交流による住民同士のつながりによるコミュニティ再生を期待する指摘も見られる(Raynes & Rawlings, 2004; 草野, 2007; 草野・瀧口, 2009; Murayama, 2010)。ソーシャル・キャピタルとは、個人または集団が相互のつながりを通して獲得され、個人や集団にベネフィット(benefit)をもたらす関係資本のことを指す(Field, 2008)。

ソーシャル・キャピタルには、政治学、経済学、社会学、公衆衛生学といった広範囲な領域において関心が集まっており、多種多様な立場が混在している。例えば、Coleman & Hoffer (1987)は社会学の立場から、

「ソーシャル・キャピタルを、個人に協調行動を起こさせる社会の構造や制度」と定義したうえで、閉じたネットワークと開いたネットワークという概念を提唱し、ネットワークが閉じている小規模な関係の中でソーシャル・キャピタルが形成・蓄積されやすいと論じている。

Putnam (1994, 2001) は、政治学の立場から社会の有り様を捉える概念として用い、国家・社会レベルで行為を論じている。すなわち、ソーシャル・キャピタルを、信頼、規範、ネットワークといった社会組織の特徴から捉え、ソーシャル・キャピタルが蓄積された社会では、人々の自発的な協調行動が起こりやすくなることを指摘する (Putnam, 1994; Putnam, 2001)。

(5) 世代間交流の課題と展開

以上で見たように、世代間交流において援用される理論は、①個人、②対人関係、③集団関係、④社会、といった多様なレベルで論じられている。

①個人のレベルでは、発達理論が援用されており、世代間交流の若い世代と高齢の世代とのダイナミクスを捉え、その相互効果を検討するうえでは有用な理論であると考えられる。しかし、鈴木(2008)が指摘しているように、エリクソンの発達段階は、年齢に応じて決まったものではなく、環境との相互作用の中で柔軟に変化していくことが前提にあることを考慮しなければならない。これは、発達理論全般に言えることであり、つまり、地域社会の中での個人発達を考慮する必要がある。

②対人関係および③集団関係のレベルに焦点をあてた理論は、世代間の差違を捉えたうえで対人間・集団間の交流とその効果を検討するうえで有用であろう。とりわけ、世代間接触モデル (Fox & Giles, 1993) は、社会・集団・個人の諸要因を含めたうえで、「交流の量」だけではなく「接触の質」に焦点をあてている点で、現実的な交流効果の検討に適していると考えられる。ただし、この複雑なモデルを実証するのは容易なことでは

なく、実際に実証されるにはいたっていない。

さらに、これまでの世代間交流理論をわが国の世代間交流モデルにそのまま適用することには問題がある。そもそも、社会的アイデンティティ理論にしても接触仮説にしても、世代の対立・葛藤が前提となっている。これは、先述した米国における世代間交流プログラムが誕生した経緯が深く関連しているように思われる。他方で、わが国における世代間交流を概観すると、高齢者と子どもの薄い関係性は指摘されているが、対立や葛藤を引き起こすような関係性はほとんど報告されていない。例えば、子どもを対象にした高齢者イメージ研究では、米国に比べて比較的ポジティブな高齢者イメージが認められている（中野，1991a；中野，1991b；馬場・中野・冷水・中谷，1993；中野・冷水・中谷・馬場，1994）。

つまり、高齢者と子どもの関係対立を前提にした理論を導入する前に、わが国における理論の適用可能性を考える必要がある。

④社会のレベルに注目した理論は、地域間のネットワークに視点を向けてその協働のあり方や効果に焦点があてられている点で、世代間交流が行われる地域特性を考えるうえで有効であるが、交流プロセスやその他の諸要因（個人属性、接触量・質など）はほとんど考慮されていない。

以上の議論を踏まえれば、社会・集団・個人のレベルをそれぞれ前提とした交流とその効果をモデル化することが必要と思われる。

6. 世代間交流論の今後の課題と展開

ここまでは、世代間交流研究とその理論構築について概観してきた。最後に、世代間交流論の課題と今後の展開について論じる。

第 1 は、世代間交流の長期的な効果の検証である。これまでの世代間交流研究では、概ね介入研究によりプログラムの効果が検証されてきた。ここで測定されてきた効果は、高齢者イメージの改善、エイジング教育、行動変容、キャリア教育、QOL などさまざまである。

しかし、そうした効果は数ヶ月という短期的なものである。言い換えれば、長期的な効果はほとんど検討されていなく、生涯発達の視点を欠いたものになっている。

第2は、交流プロセスの検証である。効果研究では縦断研究による因果関係の検証から、交流を通して“何が伝えられたのか”は明らかにされてきたが、それが“どのようにして伝えられたか”というプロセスはほとんど明らかにされてこなかった。

世代間交流がどのようにして起こり、それが当事者にとってどのような意味があるのかを解明する必要がある。

第3は、世代間交流に関連する多様な要因を考慮することである。現実の世代間交流には、個人属性のほかに環境要因や心理的要因など多様な要因がそれぞれ関連していることが想定される。にもかかわらず、これまで行われてきた効果研究では多様なプロセスはほとんど考慮されてこなかった。

以上にあげた①「世代間交流の長期的効果」、②「世代間交流プロセス」、③「世代間交流に関連する多様な要因」が検討されてこなかったことは、これまで指摘されてきた世代間交流研究のダイナミック性の欠如とも関連があるように思われる。これら3つの課題に対して、いくつかの提言を行う。

①「世代間交流の長期的効果」についてみると、個人の持つ時間や文脈を考慮したうえで世代間交流の長期的な効果を検討する必要があるだろう。例えば、心理学領域における「自伝的記憶」のような理論的枠組みを援用することも有用であろう。

自伝的記憶とは、「家族旅行の思い出」や「学生時代に体験したこと」のように、「人が生活の中で経験したさまざまな出来事に関する記憶の総体」と定義される自分自身についての記憶である（佐藤，2008）。

②「世代間交流プロセス」についてみると「現在」に再構成された「過

去」の記憶を見出すために、個人の語り (narrative) や物語 (story) を収集する質的調査法が有効であると考えられる (やまだ, 2000; 小林, 2008; 佐藤, 2008). 質的調査により、個人がどのような経緯で世代間交流に参加し、そこに何を見出しているのかを明らかにすることが期待される.

③「世代間交流に関連する多様な要因」についてみると、個人属性、地域特性および心理的側面などの変数を分析に組み込み、世代間交流と関連する多様な要因を検討することが必要であり、共分散構造分析のような多変量分析によりそれぞれの変数間がどのように関連しているのかを検討することが有効であろう.

最後に、以上であげた課題についての著者の取り組みを示す. 著者は、世代間交流プロセスを明らかにする目的で、学校支援ボランティア事業を行政主体で行っている千葉県 A 市と群馬県 B 市を調査フィールドとし、そこに参加している高齢者ボランティアを対象にインタビュー調査を実施している (Murayama, 2010; 村山, 2010). その結果、多くの高齢者ボランティアが、地域における世代間交流に参加することを通して、地域の子どもに何かを伝えたいという世代継承的な意識が高まることが認められている.

A 市, B 市の行政職員・学校職員・地域ボランティアを対象にインタビュー調査では世代間交流事業の課題として、学校側と高齢者ボランティアをつなげるコーディネーターの存在や、学校側と高齢者ボランティアの関係性の構築といった課題が示された.

インタビュー調査の結果や先行知見から、地域ネットワークをもとに認知的要因および発達の要因を媒介要因に世代間交流参加にいたる“地域における世代間交流モデル”仮説を構築した (図 4).

本仮説を実証し、それを現場に還元することで、効果的でわが国に適した世代間交流プログラムを検討することを考えている.

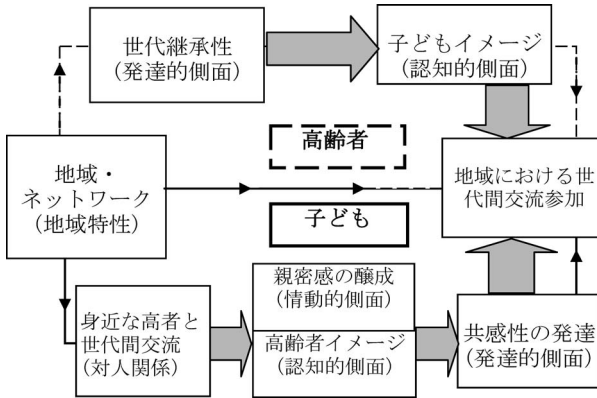


図 4. 地域における世代間交流モデル

世代間交流研究が実践の中から生まれたことを考えれば，研究で得た知見をいかに現場に活かせるかが大きな課題となる．こうした実用的な視点を見失うことなく，しかしアカデミックに世代間交流を捉えて理論的に体系づけることが必要であろう．

引用文献

- Allport, G. W. (1954). *The nature of prejudice*. Cambridge, MA: Addison-Wesley (原谷達夫・野村昭 (訳) (1978) 偏見の心理 培風館)
- 馬場純子・中野いく子・冷水豊・中谷陽明 (1993). 中学生の老人観 —老人観スケールによる測定— 社会老年学, 38, 3-12.
- Bandura, A. (1977). *Social Learning Theory*, New Jersey: Prentice Hall. (原野広太郎 (監訳) (1979) 社会的学習理論 金子書房)
- Barton, H. (1999). Effects of an intergenerational program on the attitudes of emotionally disturbed youth toward the elderly, *Educational Gerontology*, 25, 623-640.
- Bengtson, V. (1989). The problem of generations: Age group contrasts, continuities, and social change. In V. Bengtson & K. Warner Shaie (Eds), *The course of later life: Research and reflections*, pp. 25-54. NY: Springer.

- Blechman, E. (1992). Mentors for high-risk minority youth: From effective communication to bicultural competence. *Journal of Clinical Child Psychology*, 21(2), 160-169.
- Brabazon, K. (1999). Student improvement in the intergenerational work / study program, *Child & Youth Service*, 20, 51-61.
- Breytpraak, L. M., Arnold, L. & Hogan, K. (2008). Dimensions of an Intergenerational Relationship Between Medical Students and Mentors-on-Aging, *Journal of Intergenerational Relationships*, 6, 2, 131-153.
- Bryant, B. K. (1985). The neighborhood walk: Sources of support in middle childhood. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, 210.
- Bryant, B. K. (1987). Mental health, temperament, family, and friends: perspective on children's empathy and social perspective taking. In N. Eisenberg, & J. Strayer (Eds), *Empathy and its development*, Cambridge University Press.
- Chapman, N. J. & Neal, M. B. (1990). The effects of intergenerational experiences on adolescents and older adults, *The Gerontological Society of America*, 30, 6, 825-832.
- Chowdhary, U., Schultz, C. M., Hasselriis, P., Kujath, H. A., Penn, D. & Henson, S. (2000). Intergenerating activities and aging appreciation of elementary school children, *Educational Gerontology*, 26, 541-564.
- Coleman, J. S. & Hoffer, T. (1987). *Public and private school: The impact of communities*. NY: Basic Books.
- Coupland, N., Nussbaum, J. F. & Coupland, N. (1991). The reproduction of aging and agism in intergenerational talk, In N. Coupland, H. Giles & J. M. Wiemann (Eds), *Miscommunication and problematic talk*, pp. 85-102, Newbury Park, CA: Sage.
- Dellmann-Jenkins, M., Fowler, L., Lambert, D., Fruit, D. & Richardson, R. (1994). Intergenerational sharing seminars: Their impact on young adult college students and senior guest students, *Educational Gerontology*, 20, 579-588.
- Dunham, C. C. (2009). Children's attitudes and classroom interaction in an intergenerational education program, *Educational Gerontology*, 35, 453-464.
- Eddy, D. M. (1986). Before and after attitudes toward aging in a BSN pro-

- gram, *Journal of nursing*, 12, 5, 30-34.
- Eisenberg, N. & Shell, R. (1992). *The caring child*. Harvard University Press.
(二宮克美・首藤敏充・宗方比佐子(訳) (1995) おもいやりのある子どもたち 向社会的行動の発達心理 北大路書房).
- Erikson, E. H. (1950). *Childhood and society*. NY: W. W. Norton & Company (仁科弥生(訳) (1977) 幼児期と社会 I みすず書房).
- Field, J. (2008). *SOCIAL CAPITAL*. NY: Routledge.
- Fox, S. & Giles, H. (1993). Accommodating intergenerational contact: A critique and theoretical model, *Journal of Aging Studies*, 7, 423-451.
- 原英二 (2005). ノーマライゼーション推進型地域統合ケアの推進, 日本社会心理学会第48回公開シンポジウム発表要旨集, 6-7.
- Hewstone, M. & Brown, R. (1986). Contact is not enough : An intergroup perspective on the contact hypothesis, 1-44 in *Intergroup Contact*, In Hewstone, M & Brown, R (Eds), Oxford: Blackwell.
- 広井良典 (2006). 持続可能な福祉社会 ―「もうひとつの日本」の構想― ちくま新書.
- 池田祥子 (2007). 米国のインタージェネレーションプログラム, 草野篤子他(編) 世代間交流効果 三学出版, pp. 141-152.
- 伊藤忠弘・平林秀美 (1997). 向社会的行動の発達 井上健治・久保ゆかり(編) 子どもの社会的発達 東大出版会, pp. 167-184..
- 岩隈美穂 (2002). 障がい者, 高齢者とのコミュニケーション, 伊佐雅子(監) 多文化社会と異文化コミュニケーション 三修社, pp. 130-147.
- Kelley, H. H., Berscheid, E., Christensen, A., Harvey, J. H., Huston, T. L., Levinger, G., McClintock, E., Peplau, L. A. & Peterson, D. R. (1983). *Close Relationship*. New York : Freeman.
- 菊池章夫 (1998). また思いやりを科学する: 向社会的行動の心理とスキル 川島書店.
- 北村安樹子 (2003a). 幼老複合施設における異世代交流の取り組み, ライフデザインレポート, 153, 4-15.
- 北村安樹子 (2003b). 福祉政策における世代間交流の視点 ライフデザインレポート, 156, 4-15.
- Knapp, J. L. & Stubblefield, P. (2000). Changing student's perception of aging: The impact of an intergenerational service learning course, *Educational Gerontology*, 26, 611-621.
- 小林多寿子 (2008). 自己を書くことと記憶―アルツァックスの自伝的記憶― 心理

- 学評論, 51, 184-195.
- Kotre, J. (1984). *Outliving the self: Generativity and the interpretation of lives* Baltimore: John Hopkins University Press.
- 草野篤子 (2007). 世代間理論構築のための序説とその歴史, 草野篤子・金田利子・間野百子・柿沼幸雄 (編) 世代間交流効果 三学出版 pp. 1-17.
- 草野篤子・瀧口眞央 (2009). 人間への信頼とソーシャルキャピタル, 白梅学園大学・短期大学紀要, 45, 13-30.
- Larkin, E. & Newman, S. (1997). Intergenerational studies: A multi-disciplinary field, *Journal of Gerontology Social Work*, 28, 5-16.
- Levinson, D. J. (1978). *The seasons of a man's life* (南博 (訳) (1992) ライフサイクルの心理学 上 講談社学術文庫)
- Mannheim, K. (1928). *Das Problem der Generation*, *Kolner Vierteljahrshefte fur Soziologie* (石川康子 (訳) (1976) 世代の問題 マンハイム全集 潮出版社.)
- 村山陽 (2009). 高齢者との交流が子どもに及ぼす影響, 社会心理学研究, 25, 1-10.
- Murayama, Y. (2010). Adult generativity and the meaning: Exchanges between aged persons and children in Japanese local communities *Journal of Political Science and Sociology*, 12, 85-102.
- 村山陽 (2010). 小学校における世代間交流: シニアの学校ボランティア活動に注目して, 草野篤子他 (編) 世代間交流学の創造 あけび書房 (印刷中).
- 那須宗一 (1962). 老人世代論: 老人福祉の理論と現状分析 芦書房.
- 中野いく子 (1991a). 児童の老人イメージ: SD 法による測定と要因分析, 社会老年学, 34, 23-3.
- 中野いく子 (1991b). 児童の高齢者観, 月刊福祉, 74, 90-95.
- 中野いく子・冷水豊・中谷陽明・馬場純子 (1994). 小学生と中学生の老人イメージ—SD 法による測定と比較—, 社会老年学, 39, 11-22.
- Newman, S., Morris, G. A. & Streetman, H. (1999). Elder-Child Interaction Analysis, *Children and Youth Service*.
- Newman, S. (1997). History and evolution of intergenerational programs, In Newman, S et al. (Eds), *Intergenerational programs*, pp. 55-79.
- Newman, S., Faux, R. & Larimer, B. (1997). Children's views on aging: Their attitude and values, *The Gerontologist*, 37(3), 412-417.
- 野呂芳明 (2001). 「福祉国家」の理論と生きがい政策 高橋勇悦・和田修一 (編) 生きがいの社会学弘文堂, pp. 242-268.
- O'hanlon, A. M. & Broolover, B. C. (2002). Assessing changes in attitudes

- about aging: personal reflections and a standardized measure, 28, 711–725.
- Ortega, Y. G. J. (1923). *El tema de nuestro tiempo* (井上正 (訳) (1998). 現代の課題 オルテガ著作集 白水社).
- Pain, R. (2005). *Intergenerational relations and practice in the development of sustainable communities*. ODPM: London.
- Palmore, E. B. (1980). The facts on aging quiz: A review of findings, *The Gerontologist*, 20(6), 669–679.
- Pratt, M. W., Danso, H. A., Arnold, M. L., Norris, J. E. & Filyer, R. (2001). Adult generativity and the socialization of adolescences: Relations to mothers and fathers parenting benefits, styles, and practices, *Journal of Personality*, 69, 89–120.
- Putnam, R. D. (1994). *Making democracy work: Civic traditions in modern Italy*, Princeton: Princeton University Press.
- Putnam, R. D. (2001). *Bowling alone: the collapse and revival of American community*, NY: Simon & Schuster.
- Raynes, N. V. & Rawlings, B. R. (2004). Recreating social capital: Intergenerational programs and bridging networks: An English Model-Phase, *Intergenerational Relationships*, 2(1), 7–28.
- Rosenbirg, E., Layne, L. & Power, M. (1997). Intergenerational studies' growing pains: The quest for identity and implications for practice, *Journal of Gerontological Social Work*, 28, 17–31.
- Roy, B., Sharon, C. & John, F. (1996). Students as catalysts of environmental change: A framework for researching intergenerational influence through environmental education. *Environmental Education Research*, 12(3–4), 413–427.
- 桜井茂男 (1986). 児童における共感と向社会的行動の関係 教育心理学研究, 34, 342–346.
- 佐藤浩一 (2008). 自伝的記憶の方法と収束的妥当性 佐藤浩一・越智啓太・下島裕美 (編) 自伝的記憶の心理学 北大路書房, pp. 2–18.
- Scabini, E. & Marta, E. (2006). Changing intergenerational relationship, *European Review*, 14, 1, 81–98.
- 關戸啓子 (2006). 全国の幼稚園・保育所における幼児と高齢者のふれあいに関する実態調査. 川崎医療福祉学会誌, 15, 655–663.
- 鈴木忠 (2008). 生涯発達のダイナミクス 東京大学出版会.

- Tajfel, H. & Turner, J. C. (1979). An integrative theory of intergroup conflict. In W. G. Austin & S. Worchel (Eds.), *The social psychology of intergroup relations*, pp. 34-47. Monterey, CA: Brooks-Cole.
- Tajfel, H. & Turner, J. C. (1986). The social identity theory of intergroup behavior. In Worchel, S. & Austin, W.G. (Eds.), *Psychology of intergroup relations*, pp. 7-24. Chicago: Nelson-Hall.
- 高田理考 (2006). 過ぎ去りしときを思い出す 太田信夫 (編) 記憶の心理学と現代社会 有斐閣, pp. 283-292.
- 土永典明・岡崎利治 (2005). 世代間交流に関する調査研究—高齢者福祉関係施設を併設している保育所の側面から—, 九州保健福祉大学研究紀要, 6, 27-34.
- 渡辺弥生・衛藤真子 (1990). 児童の共感性及び他者の統制可能性が向社会的行動に及ぼす影響, 教育心理学研究, 38, 46-51.
- 渡辺優子 (2004). 幼児と高齢者の世代間交流の現状と問題点 新潟青陵大学短期大学部研究報告, 34, 15-24.
- VanderVen, K. (2004). Intergenerational theory in society: building on the past, questions for the future, *Journal of Intergenerational Relationships*, 2, 3/4, 75-94.
- Williams, A. & Giles, H. (1996). *Intergenerational conversation: Young adults' retrospective accounts* *Human Communication Research*, 23, 220-250.
- やまだようこ (2000). 人生を物語ることの意味 やまだようこ (編) 人生を物語る生成のライフストーリー ミネルヴァ書房, pp. 1-33.
- 山口喜一 (1990). 人口と社会 東洋経済新報社.
- Yarrow, A. L. (2009). *Sustainability and intergenerational solidarity*, *Generations*, 33 (3), 103-104.
- 吉田圭吾 (1995). 人間関係の心理臨床 澤田瑞也 (編) 人間関係の発達心理 1 人間関係の生涯発達 培風館, pp. 107-140.

付録 1. 「Journal of intergenerational relationships(Volume1)」の目次総覧

	タイトル	執筆者
Issue 1 (2003)	Perspectives on Intergenerational Aspects of Aging and Diversity	Fernando M. Torresgil
	Intergenerational Programmes as a Global Approach to Social Issues	Sally Greengross
	Intergenerational Programming for Foster-Adoptive Families	Brenda Krause Eheart; Martha Bauman Power; David E. Hopping
	Global Aging and Intergenerational Equity	Steven K. Wisensale
	Intergenerational Programming in Asia	Leng Leng Thang; Matthew S. Kaplan; Nancy Z. Henkin
	Intergenerational Storyline Bringing the Generations Together in North Tyneside	Ged Stanton; Pip Tench
	Neighbourhood-Reminiscence	Christina Mercken
	Intergenerational Influences on Perceptions of Current Relationships with Grandparents	Laura Hess Brown
	An Observational Study in Developing an Intergenerational Shared Site Program	Christopher L. Hayes
	Introducing Standards and Guidelines	Vicki Rosebrook; Elizabeth Larkin
	The State of Our Art	Valerie S. Kuehne
	Living and Learning Together	Terence Seedsman; Susan Feldman
	Tampines 3-in-1 Family Centre, Singapore	Amy Fong-Chong
	What Motivates Intergenerational Practices in South Africa?	Jaco Hoffman
	What Motivates Intergenerational Practices in India?	N. K. Chadha
	What Motivates Intergenerational Practices in Aotearoa/New Zealand?	Margaret Nicholls
Issue 2 (2003)	The Role of Federal Policies in Supporting Grandparents Raising Grandchildren Families	Carrie Jefferson Smith; Ana Beitranm
	Intergenerational Practices and Possibilities Related to the HIV/AIDS Pandemic in Botswana and Nigeria	Akpovire Oduaran,
	The LINC Project	Allison H. Nichols
	School-Based Intergenerational Programs, Susan Feldman	Helen Mahoney, Terence Seedsman
	Intergenerational Wellness Programming in Occupational Therapy, Victoria Pearlman	Minetta S. Wallingford
	The State of Art	Valerie S. Kuehne
	Ever-Increasing Intergenerational Activities in Heiloo	Nonja van der Ark
	Angel Worx	Kathy Segrtt
	An Intergenerational Program, "Nau Gran," at the University of Valencia (Spain)	Sacramento Pinazo; Julian Montoro-Rodriguez
	LRES and R & P Intergenerational Partnership	Denise Donnelly
	Is There More Intergenerational Cooperation or Conflict in Spain?	Mariano Sanchez; Carmen Tallada; Elena Sanchez
	Is There More Intergenerational Cooperation or Conflict in Canada?	Lindsay C. Davis
	Is There More Intergenerational Cooperation or Conflict in the United Kingdom?	Steve W. Ellis

付録 1. つづく

	タイトル	執筆者
Issue 3 (2003)	The Impact of AIDS on Intergenerational Relationships in Africa Program Evaluation of “Young at Heart” Examining Elderly Volunteers’ Generativity Grandparent-Headed Families in the United States Programming to Meet Unique Needs A Preliminary Study of an Intervention with Kin Caregivers Intergenerational Conflict in Korean Immigrant Homes and Its Effects on Children’s Psychological Well-Being Youth-Friendly Clinics in South Africa The Community Connection Building Bridges What Research or Evaluation Question, If Answered, Would Best Advance Intergenerational Program Development in the Netherlands? What Research or Evaluation Question, If Answered, Would Best Advance Intergenerational Program Development in Botswana?	Bede Eke Jean Pearson Scott; Alan Reifman; Miriam Mulsow; Du Feng Andrea B. Smith; Linda L. Dannison Don Cohon; Lisa Hines; Bruce A. Cooper; Wendy Packman; Elizabeth Siggins B.C. Ben Park Joanne Trabert Ashton; Kim Dickson Nina Che, Kees Penninx Choja A. Oduaran
Issue 4 (2003)	Intergenerational Learning in Stockholm County in Sweden Cultural Perspectives from Aotearoa/New Zealand Transmissive Reminiscence Therapy with College Students and Institutionalized Senior Adults Evaluating the Impact of Intergenerational Activities on Elders’ Engagement and Expressiveness Levels in Two Settings Intergenerational Consumer Influence in the US and Republic of China A Meeting Place for All Age Groups Magic Me Programme Profile Intergenerational Programs in the County of San Diego, USA,	Ann-Kristin Bostrm Margaret Nicholls Thomas Tatchell; Timothy R. Jordan; Phillip J. Waite; Renny H. Tatchell Pamela K. Xaverius; R. Mark Mathews Nancy L. Bush Jian Rong Wu; Leng Leng Thang Susan Langford Megan Urban; Marcie Eriksen

「世代間交流」学の樹立に向けて

付録 2. 「日本世代間交流学会第一回全国大会」(2010.8.7 芦屋大学)
研究・実践発表一覧

	タイトル	発表者
研究 発表 1	世代間交流「学」の創造に向けて—理論・実践の統合—	草野篤子（白梅学園大学）、金田利子（同大学）、藤原佳典（東京都健康長寿医療センター研究所）、間野百子（都留文科大学）
	LD 傾向のある子どもへの教育的支援としての世代間交流	栗山昭子（芦屋大学）、大盛幸子（芦屋女子短期大学）、村田倫（芦屋大学大学院生）
	輪廻転生に関する一考察	岡本聡（中部大学）
	赤ちゃん人形を介した世代間交流の展開—養護性と皮膚接触の重要性を手がかりとして—	塚本美由紀（芦屋大学）
	土橋小学校の世代間交流の現在コミュニティ・スクールからの取り組み	小笹奨（川崎市立土橋小学校）
	大学における世代間交流と生涯学習—白梅学園大学の試みを事例として—	井上恵子（白梅学園大学教育福祉研究センター）
	異世代との交流経験とその後のライフコースにおけるソーシャルスキル—大学生調査からみる実証的検討— 発達障害の教育支援において伝承的文化の活用性の考察—タタラの民の就労・生活様式の背景から—	斎藤嘉孝（西武文理大学） 中川祐志（芦屋大学大学院生）
研究 発表 2	大学生が世代間交流で得たことと今後の課題—アンケート調査から見えるもの—	越納美和（金城大学）、田中克恵（金城大学）、伊藤友香（金城大学）
	伝承遊びに関する高齢者の意識—小学校における指導経験者を対象に—	溝邊和成（兵庫教育大学大学院）、岡村明穂（兵庫教育大学大学院生）
	精神障害がある地域住民のコミュニティにおける役割に関する考察	山田美智子（社会福祉法人豊海会）
	共食による世代間交流は子供の生活に影響をあたえるか？	山本玲子（尚絅学院大学）
	保育園での幼児と高齢者の交流から地域世代間交流への可能性中間世代の役割	主藤久枝（白梅学園大学）、金田利子（同大学）、草野篤子（白梅学園大学）
	まちと人に橋を架ける—コミュニティカフェぶりっじの実践から—	松田妙子（NPO 法人せたがや子育てネット）、福島富士子（国立保健医療科学院）
	世代間交流プログラムとしての“乳児家庭全戸訪問事業（こにちは赤ちゃん事業）”の活用	福島富士子（国立保健医療科学院）、林友紗（慶応義塾大学）、杉田由加里（国立医療科学院）
実践 発表	子どもと高齢者の交流効果—地域型ネットワークにおける世代間交流—	山田和廣（芦屋市教育委員会）
	つむぎ直そう世代のきずな「学校内・フリースペースにおける世代間交流・絆づくりの臨床教育的考察」—不登校・登校難渋生徒への助力的かわりから探る—	鈴木百合子（百合学院前理事長）
	障がい者福祉作業所 共働事業所「かすみ荘」での実践報告	林真理子（共働事業所「かすみ荘」）
	障害者と自立—障害者施設の取り組みから—	小島純子（NPO 法人ウェルフェア中之島理事長）
	現代家族に関する一考察—核家族がたえねばならぬこと—	古田玄修（永代供養事業協同組合）
	「人を育てる唄」としてのわらべ唄	平林智子（滋賀わらべの会）
	お腹のあかちゃん～お年寄りまで楽しめる音楽で音楽と愛あふれる街づくり	澤孝子（WITH）
	兵庫県立姫野台生涯教育センターにおける大学棟との連携による世代間交流プログラム開発の取組	片岡正光（兵庫県立姫野台生涯教育センター）